

三葉虫の繁栄

硬い鎧で武装した化石の王様
「三葉虫」

群を抜く多様性を誇った古生代生物の「代表選手」、
5億8000万年前に地球上に出現したエディアカラ動物群には、脳もなければ眼もなく、殻もなかった。しかし5億4100万年前から始まった「カンブリア大爆発」で生物の様相は一変した。アモロカリスに代表される、肢をもち、体の表面に殻(外骨格)をまとった多種多様な生き物が登場したのだ。そうした「新たな」生物のひとつが「三葉虫」。当時の生物界でもっとも硬い殻で武装し、古生代最後のペルム紀後期までの約3億年もの長きにわたって生き延びた三葉虫は、古生代を代表する生物だ。三葉虫の姿は、頭部に長い角を備えたものから、殻の形が人の顔を連想させるものまで、実にさまざま。大きさも、成体で5ミリメートル以下の種もいれば、約90センチメートルまで巨大化する種もいる。形態のバリエーションが非常に豊かである。化石に残りやすく、地質時代の決定に役立つ標準化石としても重視されてきた。そのため三葉虫は、現在もなお「化石の王様」として、研究者はもちろん、一般の化石収集家からも絶大な人気を誇る生物なのである。

